

経営部門

栃木県芳賀郡市貝町

農業生産法人有限会社

ジェイイーティーファーム

(代表：代表取締役社長 篠田教雄)

リスクの軽減を追求した 大型乳肉複合経営の実践



代表の篠田教雄氏

第54回全国農業コンクール全国大会グランプリ「毎日農業大賞」

ジェイイーティーグループは、乳肉複合のメガファームを基礎として、生乳生産、F₁育成肥育、乳用もと牛育成、和牛子牛、たい肥生産と自給飼料生産部門を有している。これらの部門をジェイイーティーファーム、栃木ファーム、JET・アグリサポートという3つの法人に分離し、第1に安全・安心、第2に効率化・省力化によるコスト削減、第3に環境への配慮と地域住民を通じた社会的貢献という理念をもって経営されている。

現代表の父である篠田修紀氏は北海道江別市で肉用牛肥育を営んでいたが、昭和62年に現在の栃木県芳賀郡に牧場を購入し、「大消費地に近い関東近郊で農場を経営することが有利」との考えから、平成2年に事業の主体を現在の地に移すとともに酪農も開始している。その後、着実に規模拡大させ、平成17年1月現在、グループ全体で乳牛2400頭、F₁子牛育成牛1700頭、F₁肥育牛2300頭、黒毛和種子牛120頭を飼養している。

3つの法人のうちジェイイーティーファームは主として生乳生産と産生子牛のほ育・育成を行っている。牛肉の輸入自由化と相応する時期に開始した酪農は、現在、全国一の生乳出荷を誇るとともに、栃木ファームが担う肥育部門へのもと牛供給機能の役割がある。このようにBSE等取り巻く環境によって価格変動が大きい肉牛部門に、乳価変動が小さく収支の予測が容易な酪農経営を複合化させることで安定した経営基盤の強化を図っている。

また、収支構造に限らず、日常的な飼養管理の面でも両部門のメリットを生かした経営を行っている。例えば、肥育牛舎における暑熱対策や飼槽の廃止等、酪農の知恵によって労働効率の徹底を図っている。

なお、当経営は消費者のいわゆる「安全・安心」という志向に対応し、Non-GMO飼料を給与しているが、この一環として、飼料生産部門のJET・アグリサポートを立ち上げ、購入や地域の遊休地の借地による粗飼料生産に取り組んでいる。このことは輸入飼料に依存する現状にあって、高騰や輸入ストップの場合に経営への打撃を低く抑えるためのリスク回避をも考慮してのものである。

また、大型経営においても参考となる面が多い。ISO9001を取得したことで全ての作業がマニュアル化され、リーダーごとに明確な業務遂行体制がとられている。また、社会保険と社員教育メニューを整備している。衛生面については専属の獣医師が毎日巡回し問題点の把握と適切な対応を図るほか、消毒・清掃も慣行させ、とくに消毒タオルは万全を期すため、消毒・乾燥を外部専門業者に依頼するなどリスクの分散を欠かさない。地域との共生についても一番の課題として対応してきており、例えば、近隣の耕種農家にたい肥を無償譲渡、飼料生産の借地は近隣の酪農家等があまり利用しないところを借り受けるなど、地域との課題を抱えるメガファームのモデル的な事例でもある。

以上のように、流通・販売を意識した立地条件の選択、肥育部門におけるもと牛確保のための酪農部門導入、法人を分散化させることでの製造原価の把握と経営リスクの分散を図るなど、飼養規模の大小に関わらず、経営の効率化・発展の過程での考え方の面で多くの経営の参考になり得る事例である。

▼ジェイイーティー牧場牛乳

タカナシ乳業から『ジェイイーティー牧場牛乳』を販売している。



▼本社・栃木牧場

大消費地に近い関東近郊で農場を運営することが有利との考えから事業の主体を移転した。



▼ミルクングパーラー

25頭ダブルのパーラーで24時間3交代制で1時間に約230頭を搾乳している。



▼生乳生産

生乳は、全量を酪農とちぎ農業協同組合に出荷し、関東生乳販連を經由して、各乳業メーカー、タカナシ乳業、針谷乳業に供給。



▼肉用牛の牛舎

暑熱対策のために、天井を高くした肉用牛肥育牛舎。



▼搾乳牛の飼養状況

乳牛2千頭が飼養され全国一の生乳出荷を誇る。

